

年賀を欠礼した。母が他界して三カ月になる。まだ涙が出ない。女手一つで息子と娘を育てた。夫が仕事に失敗し、幼い二人を連れて夜逃げした。保険の外交で三人は糊口をしのいだ。その後も波

窓のそとは、森

②母とコースター



慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科教授
中村 伊知哉

乱に満ちた人生を突っ走った。いつも走り回っていた。いつも爛漫であった。

おしゃれにも美食にも関心がなかった。資産にも縁がなかった。元氣だけがあった。せっかちに突

っ走り、富に縁遠い血は、息子に受け継がれている。

前触れなく倒れ、わずかな闘病を経て、あわただしく世を去った。人生を凝縮したような最期だった。京都に生まれ、京都で散った。親類縁者もみな、「らしい死に方」に納得し、通夜も葬儀も笑いに満ちていた。

さてと。一段落し、遺品を整理した。うなり声を上げるほど質素だった。生前の枕元にあったのは、私の数冊の著書と、いくばくかの写真と、二枚の丸い薄紙のコースター。それだけだ。

そのコースターは、何やらマークが描いてあるのみで、濡れたらすぐ破れてしまう粗悪品。ミュンヘンのナチス結成の舞台となったビヤホールとか、リパブルあたりの地ビールでもてなすバブなんかで作っている、おみやげにもってこいの口ゴ入り厚手コースターとは比べようもない。

その二枚の裏に、文字がある。幼い字で、「カサブランカ、モロッコ、2001.3.17」。そしてそれぞれに、私の息子たちのサイン。それだけだ。十四年前だから、彼らが十歳と七歳のころだ。

思い出した。そのころ私たちはアメリカに住んでいて、息子たち



を連れて北アフリカに旅に出た。カサブランカの混沌とした市場を訪れた。へび使

いにかまれた。けたたましい口バの楽隊の列に巻き込まれた。とてつもない異臭のする革の加工場を通った。大きな大きな夕日があった。

ヘトヘトになってたどりついた宿。コースターの文字は、そこで書いたものだ。なぜ京都に住む、ほとんど会ったことのない祖母に字を書くことになったのか。覚えていない。「おばあちゃん元気？」ぐらいのメッセージはあつてよからう。だが、息子たちは緊張していたのだらう。疲労していたのだらう。自分の名前と、場所と日付だけをせいっぱい書いたものと思われる。

どの国のどの街を訪ねても、郵便局に足を運ぶ。カサブランカでも行ったのかな。覚えていない。

だが、二枚の薄いコースターが、確かに海を渡り、京都の母の枕元に届いていた。今になって、届けてくれたかたがたに、深く感謝する。

母はそれを十四年、枕元に置いていた。七十九で死ぬ間際まで働きづめで、毎週、水泳教室でバタフライの記録に挑戦し、友人たちと騒いでいた母が、孫の文字を人知れず後生大事にしていたのは、なぜだろう。

洋服も時計も遺さず、他にも値打ちのあるものがあつたと思われ、大切にしていたのは、なぜだろう。わからない。私が未熟だからだろうか。いずれ孫でもできれば、わかるのかもしれない。涙がでるのは、それからかもしれない。

プロフィール 一九八四年郵政省入省。橋本行革で省庁再編に携わったのを最後に退官し渡米。一九九八年MITメディアラボ客員教授。二〇〇二年スタンフォード日本センター研究所長。二〇〇六年より慶應義塾大学教授。社団法人融合研究所所長などを兼務。著書に『コンテンツと国家戦略』（角川Panorama選書）など多数。